

〈史料紹介〉天正3年正月南宗寺禅問答と堺の 茶人たち：「仙岳宗洞答問21条」

石田, 雅彦 / ISHIDA, Masahiko

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

47

(開始ページ / Start Page)

116

(終了ページ / End Page)

130

(発行年 / Year)

1995-03-24

〈史料紹介〉

天正三年正月南宗寺禅問答と堺の茶人たち

— 『仙嶽宗洞答問二十一條』 —

石田雅彦

一 はじめに

写真に見られるような『仙嶽宗洞答問二十一條』（以下『二十一條答問』）と題された一巻の書を預かった。読み進めるうちに、千宗易（利休）が「一口吸盡西江水」の公案を透過し、大徳寺古溪和尚から「拋筌籬」号を受けたのは天正元年九月とも十一月ともいわれる、という通説に関連する史料ではないかと思われるようになった。

この西江水の公案と拋筌籬に関する説は、千利休が禅の悟りを開いたという意味で、利休研究にとっては大きな意味を持つが、しかしながらこれに関する直接的な史料は見当らない、というのがこれまでの状況であった。

そこで私は、史料『二十一條答問』が余りにも唐突に出現したいきさつから、まず千利休研究の新史料として成立するか否かを検証し、次いでその内容と史料を取り巻く世界が、いかなるものであったかを見てみたいと思う。

先に、『二十一條答問』を読み下しておこう。

「書誌」 袂紙に外題はないが『仙嶽宗洞答問二十一條』と箱蓋に書かれている。卷子本で縦二十四センチ・全長百三十六センチ・紙質は楮紙。本紙表紙の部分に「仙嶽洞禅真筆」とある。

（一）内は訂正前の文、便宜上頭にナンバーを付した。）

『仙嶽宗洞答問二十一條』

1

師問て曰く。昨夜虚空神夢中に到て云く。歳旦の令辰、和尚例に随つて、旧の話頭を擧揚し、大衆を勸辨し了れ。遽然して夢覺む。記得す。江西の馬大師因に、龐蘊居士問う、萬法与侶為らざる者はれ什麼人ぞ。請う、首座一語を下せ、看ん。首座云く、今日入室す。梅根は宇宙に蟻、枝乾坤に茂る。師曰く、意旨如何。座云く、能く萬像の主と為り、四時を遂て凋まず。師曰く、大師答て云く、汝が一口に西江の水

を吸盡せんを待つて、即ち汝に向つて道わん。意旨そもさん作麼生。
座云く、費盡す、老婆多少の力を。師曰く、更に道え。座云く、錦心きんしん繡口しゅうこう人に向つて開く。師打して曰く、謬あやまたず、第一座園なり。

2 一僧云く、至寶 軒に當りて光 萬像を含む。師曰く、意旨如何。僧云く、十方に通貫す。師便打。 文

3 一僧云く、三世諸佛も亦いんも恁麼、歷代の祖師も亦恁麼。師曰く、意旨如何。僧云く、只管之に由る。師便打。 壽

4 一僧云く、誰か敢えて近傍せん。師曰く、意旨如何。僧云く、牙剝はき樹の如く、口血盆に似たり。師便打。 慶

5 一僧云く、戸牖こぎを給開あつかひして軒に當る者は誰そ。師曰く、意旨如何。僧云く、天上天下唯我獨尊。師便打。 幸

6 一僧云く、久遠くげん已前に看んことを要す、即ち瞎か。即今亦看んことを要す、即ち瞎。師曰く、瞎底かてい裏。僧云く、黒漆桶裏に墨汁を盛る。師便打。 永

7 一僧云く、無量の珍寶求めずして自得す。師曰く、如何なるかは無量の珍寶。僧云く、満室堆席。師便打。 栢

8

一僧云く、鰯げんう頭けづ甄別し難し。師曰、甄別し難き底裏。僧云く、驚おどろ鷺雪に立つ。師曰く、意旨如何。僧云く、白漫々。師便打。 好

9 一僧云く、古木花開く劫外の春。師曰く、如何なるか是れ古木の花。僧云く、無根徒長ず。師便打。 悦

10 一僧云く、認したため夜明の珠と作す。師曰く、如何なるか是夜明の珠。僧云く、古に輝き今に輝く。師便打。 椿

11 一僧云く、南山の白額虎。師曰く、如何なるか是れ白額虎。僧云く、佛祖も倒退三千。師曰く、意旨如何。僧云く、天に連なり地に跨またがる「暗昏々」。師便打。 仙

12 一僧云く、是非を把り來つて我を辨ずこと莫かれ。浮生の穿鑿相干せず。師曰く、不干底裏。僧云く、莫然として物外。師便打。 卷

13 一僧云く、此れは是れ龍興山頂の主。師曰く、如何なるか是れ主。僧云く、當軒大座。師便打。 泉

14 一禪人云く、蛭は趨りて庭を過ぐ。師曰く、意旨如何。禪人云く、活かつ鱗々地。師便打。 易

15

一 禅人云く、南山に一條の鼈くもひだ鼻蛇有り。師曰く、如何なるか
是れ鼈鼻蛇。禅人云く、即今近傍し難し。師曰、近傍し難
き底。禅人云く、頭角づかきもつこう嵒さうろう。師便打。 壽

16 一 禅人云く、恰も清税孤貧なるに似たり。師曰く、如何なる
か是れ貧。禅人云く、本来無一物。師曰く、如何なるか
是れ無一物の處。禅人云く、淨裸々赤洒々。師便打。 狐

17 一 禅人云く、力を盡して高聲に呼べども應ぜず。師曰く、什な
麼んとしてか呼べども應ぜざる。禅人云く、活卓々、孤迴けい
々。師便打。 句

18 一 禅人云く、大力量の人。師曰く、力量底。 鼈「如何是れ大
力量の人」。禅人云く、盡大地。撮し來たるに粟米粒の大
いさいの如し。師便打。 及

19 一 禅人手を拍って云く、此れ聲聞梵天。師曰く、如何なるか
是れ此聲聞。禅人云く、木人鼓を打ち、石女起って舞う。
師曰く、舞底。 鼈。禅人云く、遊戲神通あそびとんず「無為無事の故
に」。師便打。 二

20 一 禅人云く、無影樹下の合同船。師曰く、如何なるか是れ合
同船。禅人云く、消得す多少の風。師曰く、消得する底
鼈。禅人云く、失。師便打。 德

21

一 僧云く、佛法と王法と一般。師曰く、如何なるかれ一般
底。僧云く、威雄十方に震い、聲價實字を動かす。師曰
く、大師答へて云く、汝が一口に西江の水を吸盡せんを
待つて、即ち汝に向つて道わん。意旨作麼生そもえん。僧云く、陰
谷に春を生ず。師曰く、如何なるか春を生ずる底「陰谷
春」。僧云く、引得たり。 黄鶯下の柳條。師便打。 眞の獅
子兒。

天正三年乙亥正月朔旦

侍者宗登これま焉こ記す

22

仙嶽洞禅師之真蹟也。師初め諱の字を登に作る。後に洞と改
む。是於これ豫矣。

宗竺證（印）

二 史料性について

まず、この『二十一條答問』がどんなものであるかを概観して
おきたい。

これは、天正三年正月朔日におこなわれた禅問答の克明なる記
録である。筆者は文末に「侍者宗登焉記」とあることから宗登と
名乗る禅師の修業僧と考えられる。

正月朔日の禅問答に参加したのは「二十一條答問」の名のとお
り二十一名。前半の十三名が僧侶で、中間の七名が禅人といわれ
る在俗の人達であり、最後の問答に立ったのが筆者の宗登であつ
た。そして、宗登署名の後の行に次のように別紙に書かれて、本

紙に切り張りをしてある。⁽³⁾

仙嶽洞禪師之真蹟也。師初諱字作登。後改洞。是於豫矣。

宗竺證（印）

これは、『二十一條答問』を鑑定した証明文であるが、この「宗竺」というのは大徳寺百九十世の「天室宗竺」のことを指し、「仙嶽洞禪師」という人物は同じく百二十二世「仙嶽宗洞」がこれに当たると思われる。そこで拙稿はこの天室宗竺の筆跡をきっかけにして、これが史料性を問うてみたい。

（1）天室宗竺の筆は真筆か

天室宗竺は『龍寶山大徳禪寺世譜』⁽⁴⁾（以下『世譜』）によれば、承応三年（一六五四）に百九十世として五十歳で大徳寺に入寺している。『二十一條答問』が書かれた天正三年（一五七五）からは七十九年へだたっているが、『大徳寺系図』⁽⁵⁾（別表参照、以下『系図』）を見てのとおり同じ大徳寺北派流⁽⁶⁾であり、しかも、執筆者仙嶽宗洞の兄弟子春屋宗園の孫弟子である関係から、鑑定者としてはしかるべき立場にあったと云えよう。そして幸いなことに、『二十一條答問』には天室宗竺の落款が押されている。まずこの落款が真正のものかどうかを検討してみたい。

この双方を比較してみると、署名という印の寸法（十四ミリ）といまさに瓜ふたつといえよう。かえって『二十一條答問』の印署名の方が、花押辞典よりもしっかりしている様にも見える。しかしながら私はもとより素人であるので、専門の道具鑑定家に比較検討を依頼したところ、「この字体も落款も間違いなく天室宗竺のものである」との評価を得た。そうするならば、天室宗竺

天正三年正月南宗寺禪問答と堺の茶人たち（石田）

図1 『二十一條答問』天室宗竺の落款

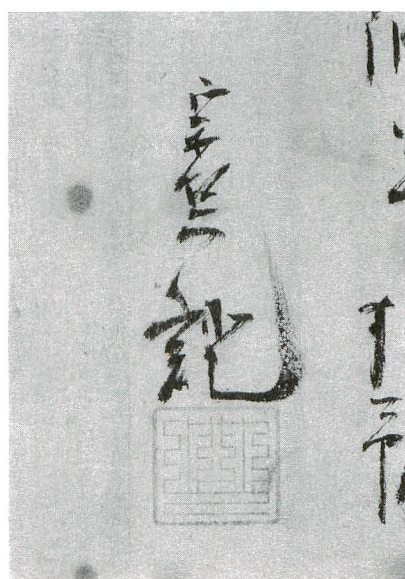
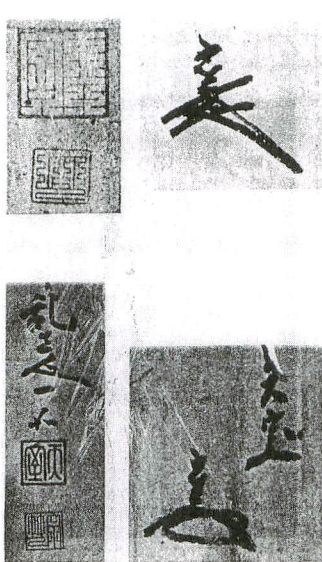


図2 『落款花押大辞典下』天室宗竺の項より



が鑑定した仙嶽宗洞の『二十一條答問』も真跡といえよう。とはいえ、本史料の重要性からいまま少し検討を加えてみたい。

(2) 宗登は仙嶽宗洞と同一人物か

天室宗竺はまた次のようにも書いている。

師初諱字作登。後改洞。

「師初め諱の字を登に作る。後に洞に改む。」と。すなわち、

仙嶽宗洞は昔「宗登」と名乗っていた時代があるというのである。これを確認しようとしたが、『世譜』にはこのことは記されていない。そこで、堺の茶の湯者達との交流を記した『天王寺屋会記』の内から「宗及茶湯日記自会記」(以下「会記」)を見てみた。この「会記」というのは、当時堺の豪商で茶の湯者であった津田宗及が自分自身で催した茶会の記録である。そこには、毎回招待した人々の名前と茶会の道具が記されているが、その招待者たちの名前の中に、

天正二年霜月六日朝

咲嶺様 春屋様 登慶
椿 甫

天正三年十一月十七日朝

咲嶺様 春屋様 登首座

と記録されている。これを「系図」と比べてみれば、咲嶺様とあるのは「笑嶺宗訢」(咲は笑、笑が本字)で、春屋様は笑嶺の弟子「春屋宗園」、登・慶・椿・甫は修業僧と思われる。天正二・三年当時笑嶺宗訢は堺「南宗寺」におった。⁽¹⁾津田宗及の茶会に招待された住持笑嶺和尚に春屋と登達が随行し相伴したのである。つまりそこには

笑嶺宗訢—春屋宗園—登首座

という人物構成が成立している。そしてその四年後、

天正七年十月二十六日晝

南宗東堂 春屋和尚 仙嶽和尚

なる記載がある。南宗東堂は「大徳寺法階」(以下「法階」)によれば南宗寺住職のことで当然笑嶺宗訢を指すと思われるから、先の人物構成に準じるならば、

笑嶺宗訢—春屋宗園—仙嶽宗洞

となる。先に天室宗竺がいみじくも指摘したとおり、天正三年から天正七年の間に、登首座は「宗登から仙嶽宗洞」に名を改めたと思われるのである。

(3) 人物構成

今、天正期の南宗寺における人物構成について述べた。つまり「笑嶺宗訢—春屋宗園—宗登」の図式である。ここにおいてひとつの疑問がある。「系図」をみても解るように、春屋宗園と仙嶽宗洞の間に古溪宗陳(陳首座)という宗登の兄弟子がいるのである。本来であれば、

笑嶺宗訢—春屋宗園—古溪宗陳—宗登

でなければならない。たしかに「会記」には、

永禄十年卯拾月十九日 口切 咲嶺和尚 陳首座

永禄十二年十一月二十二日晝 咲嶺和尚 春屋和尚 陳首座

元龜二年四月二十八日 陳首座 慶首座 登首座

同年十月二十二日朝 南宗寺咲嶺和尚様 陳首座

長慶寺語首座

というように、永祿・元龜期には笑嶺和尚に必ず春屋が宗陳がつきそっている。『系図』上の師弟関係のとおり笑嶺―春屋―古溪―宗登、の基本的な構成が見られるのである。つまり、これを当時の南宗寺に関連した笑嶺の弟子構成に当てはめると、

南宗寺住職 笑嶺宗訢

一番弟子 春屋宗園（実際には在京後述）

二番弟子 陳首座

三番弟子 登首座

ということになる。やがて、天正元年正月に古溪宗陳が大徳寺百十七世として入寺して南宗寺から去ると、残された和尚達の師弟構成は、

南宗寺住職 笑嶺宗訢

一番弟子 春屋宗園

三番弟子 登首座

必然的にこの人物構成となるのである。

今『二十一條答問』にもどってこれを見ると、まず問答の第一座が春屋宗園であるから、「師曰」の師は笑嶺宗訢になる。そして、執筆者は侍者宗登であるから、天正三年の坐禅会の主要構成メンバーは「笑嶺・春屋・登」となり、人物構成は右に示した構成とまさに一致するのである。従って、天正三年に書かれた『二十一條答問』の人的構成は、他の史料とも同じなのである。

(4) 仙嶽宗洞の筆跡か

いままで『二十一條答問』の史料性を問うて来た。ここに至って、この史料が真筆か写本かの問題がある。確かに天室宗竺は真

天正三年正月南宗寺禅問答と堺の茶人たち（石田）

跡であると鑑定している。他の資料と比較しても、間違いない仙嶽宗洞の筆であるならば、一段とこの文書の史料性が高まるのだが、しかしながら筆者には仙嶽宗洞の筆跡を比較検討する資料を持たない。写真の資料のみを利用するだけであるが、これにしても年代がかなり後のもので比較対象のものとしては、資料性に乏しい。そこで再度先の専門家に鑑定を依頼した。それによれば「仙嶽宗洞その物の対比資料が少ないので確かなことは云えないが」と前置きして、

(イ) この字は筆の速さからして写しではなくオリジナルのものである。

(ロ) 字文の間違いそして訂正内容が的確である。

(ハ) もしこれが写本であるなら、訂正した後の間違いの無い正文のみを写したであろう。

(ニ) そして、天室宗竺の筆跡が真筆であり、その天室宗竺自身がこれが「仙嶽宗洞の真蹟」と鑑定するからには、それを認めるのがこの場合妥当であろう。

として、『二十一條答問』の筆跡は仙嶽宗洞のものと思われる、との鑑定評価を得た。

(5) 結論

以上、四項目にわたって『二十一條答問』の史料性について検討してきた。それにつき拙稿は、

(イ) 『二十一條答問』を鑑定した天室宗竺の落款は真正のものであった。

(ロ) 宗登が後に仙嶽宗洞に名を改めたのは天室が指摘したとお

り事実であった。

- (イ) 坐禅会を運営する人物構成が他の史料と一致する。
 (ニ) 筆跡が仙嶽宗洞のものと思われる。

以上のことから、私は本史料を、天正三年正月朔日、南宗寺に於いて行なわれた坐禅会の問答を、仙嶽宗洞が執筆者となって記録したものと確定したい。

三 南宗寺禅問答と堺の茶人たち

(1) 笑嶺宗訢と西江水公案

天正三年正月元日の朝、虚空菩薩が南宗寺住持笑嶺宗訢の昨夜の夢の中に現われ「この正月の吉日には、和尚（笑嶺自身のこと）例に従って、旧の話頭（笑嶺が悟ったとされる萬法と侶たらざると云う公案）⁽¹⁸⁾を擧揚し、大衆を勸辨しおわれ。」と示した。笑嶺は驚いて夢から覚め、そして記得（思い出）した。すなわち、江西の馬祖道一大師に龐蘊居士が問うた「萬法と侶たらざるものはれ何人ぞ」⁽¹⁷⁾の公案を。

そこで請（問）う。首座（春屋宗園）右の問いについて一語を下せ。看ん。首座云く。「今日入室す。梅根は宇宙に蟠、枝乾坤に茂る」。笑嶺が問う。「その意旨は如何」と。

首座が答えて「能く萬像の主と為り、四時を遂うて凋まらず」。笑嶺は曰く「馬祖大師は龐蘊の問いに答えて云った。

「汝が一口に西江の水を吸盡せんを待って、即ち汝に向って道わん」⁽¹⁸⁾と。この意旨はどうだ。首座答えて云う。「費盡す、老婆多少の力を」。笑嶺はまた問う。「更に云え」。首座

は答えて云った。「錦心繡口人に向って聞く」。笑嶺は膝を「ハタ」と打って曰った。「謬ず第一座為り。」

というのが、天正三年正月に笑嶺が問答を始めた理由であり、春屋宗園とのやりとりであった。これから、うかがうに馬祖大師と龐蘊との公案は、笑嶺にとってよほど思い出深いものであったらしく、「記得す」と云っている。そして南宗寺で正月に行なわれる座禅問答は、毎年行なわれているものではなく、この年特別に催されたものといえよう。前年天正二年に三好長慶に背いた松永久秀の乱人によって、南宗寺の堂舎が焼失しているが⁽¹⁹⁾そのための特別坐禅会であろうか。

さて、笑嶺の問いにたいする春屋の答えの内容であるが、いかんせん、このような問答は私の理解の及ぶところではない。問答の解釈については、専門の先生方にお任せ申しあげて、せめて読むことだけにとどめておこう。

そこで、まず「二十一條答問」にみられる、この日に参禅した人々とその背景をみてみたい。

(2) 坐禅会場南宗寺

坐禅の会場となった南宗寺は、堺にあって臨済宗大徳寺派の別格地であった。⁽²⁰⁾大徳寺北派棟梁の古嶽宗旦は堺を愛して舳の松町に隠居所「南宗庵」を営んだが、それが南宗寺の発端になった。つまり、弘治二年七月古嶽宗旦の法嗣大林宗套が開山となつて、堺と強く結びついていた三好長慶の力を得て、南宗庵を改築造営して南宗寺が創建されたのである。そして、堺における茶の湯の隆盛期と重なり同時に、茶の湯の禅味を大徳寺衆にもとめる堺

衆たちによって、南宗寺は大徳寺北派の経済的な拠点となつて
いったのである。⁽²¹⁾

ついで弘治十一年大林宗套が示寂すると、弟弟子の笑嶺宗訢が
後を嗣いで第二世となつた。この二世笑嶺の代になって、弘治以
来増築に務めた当寺の規模は殆ど完備するのである。

元龜四年六月將軍足利義昭によって南宗寺は五山に次ぐ禪院十
利に加えられた。そして、先に記したように天正二年三月松永久
秀の乱入によって放火せられ、堂舎の過半を失つたのである。⁽²²⁾

その後、笑嶺は天正十一年に遷化するまで長く南宗寺に住し
た。このような時代背景を受けて天正三年正月元日に『二十一條
答問』の坐禪・問答が行われたのである。

(3) 坐禪会に集つた人達

ついで、この正月坐禪に参会した人々をみてみよう。まず、参
会した人は師匠笑嶺を入れて二十二名。公案に挑戦した会衆は二
十一名である。この二十一名を一人一人確認してみたいが残念な
がら、「一字名」でしか書かれていない。もちろん春屋宗園や宗
登は先に記したように解つたが、「易」が本当に千宗易であるか
はつきり確定できないのである。

そこで比較検討に非常になつたのが、大徳寺高桐院に所
蔵されている『古溪和尚入寺之奉加帳』天正元年癸酉九月拾五
日』という史料であつた。天正元年正月十七日、古溪宗陳は大徳
寺住持百十七世を嗣席した。⁽²³⁾この年九月十五日南宗寺を中心に関
係した人々が、古溪宗陳の入寺を祝つて奉加帳をまわしたのであ
る。ほぼ同じ年代であり、南宗寺に関連した人達なので一字名を

追つて行くうえで、非常に参考になつた(この史料は参考史料と
して後に載せた)。

この史料を検討すると、天正三年正月坐禪会に参加した衆のう
ち十五名が、二年前の古溪宗陳の入寺に奉加金を寄進しているの
である。すなわち問答に立つた順番(Noは問答の順番の番号)で
見れば、

禪僧

春屋宗園(京衆) 二貫文 (1)

壽首座 五百文 (3)

慶首座 五百文 (4)

幸首座(京衆) 五百文 (5)

栢首座 虚堂禄一部 (7)

好藏首 一貫文 (8)

椿藏首 五百文 (10)

泉藏首 五百文 (13)

宗易 百貫文 (14)

博多屋宗壽 十貫文 (15)

宗句 四貫文 (17)

天王寺屋宗及 五十貫文 (18)

薩摩屋宗二 十石 (19)

徳庵 華輪盆一枚 (20)

執筆者 登首座 一貫文 (21)

禪人

というようになり、ここに記される堺の人達が、南宗寺を通じて
笑嶺や古溪と深く関わつていたことが解つた。興味深いことは、
春屋宗園と幸首座が京衆と書かれていることである。『二十一條

答問「文中に春屋宗園が「今日入室す」と述べているので、当時春屋は京都大徳寺の三玄院に住していたと思われ、春屋和尚と随行の僧幸首座は元日の朝、共に京から下って来たに違いない。さすれば、禅人を中心に一字名を検討すれば次の人達になる。

14、宗易は堺の茶の湯者「千宗易（のち利休）」

15、博多屋宗壽は堺豪商の「はかたや宗壽」⁽²³⁾

16、狐名は不詳

17、宗句は比定できないが「宗九」堺今市の人ではなからうか。⁽²⁴⁾

18、天王寺屋宗及は茶の湯者「津田宗及」

19、薩摩屋宗二は「山上宗二」と云われる茶の湯者⁽²⁵⁾

20、徳名は徳庵か、不詳

以上をもつて考えるに、天正三年正月の坐禅会に参会した禅人たちは、豪商でありながら茶の湯に傾倒し、しかも「禅の悟り」を模索していた人々と思われる。

(4) 茶人「宗易・宗及・宗二」の問答

では、茶の湯者として知られる千宗易・津田宗及・山上宗二は西江水の公案にどう答えたのであろうか。「二十一條答問」の中から引用してみたい。

笑嶺和尚は問うた。

大師答て云く、汝が一口に西江水の水を吸盡せんを待って、即ち汝に向つて道わん。意旨作麼生。

宗易答えて云う。

鯉趨りて庭を過ぐ。師曰く、意旨如何。禅人云く、活鱖々地。師便打。

宗及答えて云う。（「」内は訂正前の語）

大力量の人。師曰く、力量底。𡵓「如何なるか是れ大力量の人」。禅人云く、盡大地撮し來たるに粟米粒の大きいさの如し。師便打。

宗二答えて云う。

禅人手を拍つて云く、此れ聲聞梵天。師曰く、如何なるか是れ此聲聞。禅人云く、木人鼓を打ち、石女起つて舞う。師曰く、舞う底。𡵓。禅人云く、遊戲神通「無為無事の故に」。師便打。

と答えたのである。先にも記したが問答そのものの内容解釈は他に譲るが、いずれも坐禅の経験に裏付けられた力を感じる、解答と思えるのである。

しかしながらこの問答によって「二十一條答問」の解答者達はこの公案を透過したのであろうか。

「師便ち打す」はいかなる意味を持つのであろうか。これもその道の方に御教示をいただいた。

およそ禅家の「棒」や「打」は必ずしも罰棒だけとは限らない。賞棒もあれば「是れ何ぞ」と気づかせる警棒の棒もある。こ

この「便ち打す」は、「おおそうか、それならよからう」という位の意味であろうとのことである。事実笑嶺が春屋の答えに対し、打った後「謬たず、第一座為り」と評しているが、これは「流石は首座だけのことはある」という意味であり、最後に立った宗登（洞）に対しても、打った後「真の獅子児」と賞賛の辞を発している。してみると、この『二十一條答問』に通じてみえる「便ち打す」は、二十一人の答え（見解）を嘉したものの、公案の透過を許したものと見てよいのではなからうか。

四 おわりに

これまで長きにわたって『二十一條答問』の史料性と、内容を検討考察してきた。これによれば、堺の人々は南宗寺住持笑嶺宗訢と非常に深い関係を持っていることがうかがえた。それは、くしくも「会記」のうえにも顕著にみられており、笑嶺を通じて春屋宗園や古溪宗陳そして仙嶽宗洞との深い交流にもつながっていったのであろう。

最後に、茶の湯史上における『二十一條答問』の影響を考えてみたい。すなわち次のことである。

- イ 千利休を含めた堺の茶人達は天正三年正月以前には、まだ「西江水」の公案を透過していなかった。
- ロ 西江水の公案はたしかに大徳寺北派において代々好まれた公案であるが、利休が透過したとされるこの公案は、古溪宗陳ではなく、古溪の師笑嶺宗訢から出されたものであった。
- ハ 通説によれば利休は、この西江水の公案を透過することに

よって「抛釜齋」号を受けた、といわれているが、本『二十一條答問』からは抛釜齋号を、これによって得たかどうかはうかがえない。ただし抛釜齋の初見とされるのは、管見の限りでは天正三年九月十六日付け織田信長の黒印状が日付が確認できる最初の史料である。この『二十一條答問』が天正三年正月の日付であるので、もしこの問答透過後に抛釜齋号を得たとするならば、すこしばかり出来すぎであらうか。

しかしながら本『二十一條答問』は茶の湯上の史料性以外に、笑嶺和尚とこの坐禅の会に参会した僧侶や禅人たちが、「丁々発止」と問答を投げ合う様が、生き生きと描写されている点に注目したい。その中には歴史上重要な春屋宗園や仙嶽宗洞がおり、そして千利休・津田宗及そのうえ山上宗二まで含まれているのである。

このように見れば『二十一條答問』は、問答の内容や人物をもっと深く考察することによって、茶の湯史上だけでなく、禅宗史や禅問答関係の一級の史料にもなりえるのではなからうか、と思われる。

註

- (1) 東京在住、北見修氏蔵。史料の外箱に『仙嶽宗洞答問二十一條』と記されている。表頁が新しいことから、所蔵者の父北見修二氏の書と思われる。北見修氏には、貴重な史料を心安くお貸しください、研究させていただいたことに深く感謝申しあげたい。
- (2) 千原弘臣「利休の年譜」（淡交社、昭和五七年）二三頁。
- (3) 「切り張り」表頁師大窪春鳳堂製と表示があったので、問い合

せたところ「表装以前は、天室宗密の上書きがされた封筒の中に『二十一條答問』の史料が折り疊まれて入っていた。表装をするにあたって天室宗密の上書の封筒を開いて本紙の後に、現状のように張りつけた」とのことであった。

(4) 『龍寶山大徳禅寺世譜』(思文閣出版、昭和四四年) 一七五頁。

(5) 『大徳寺系図』(角川茶道大辞典、平成二年)「大徳寺伝法系図」より作成した。

(6) 『大徳寺北派』大徳寺第七十六世古嶽宗旦の法流。「系図」参照『大徳寺と茶道』淡交社、昭和四七年一九四頁。

(7) 『落款』書画や器物の作者の署名・印判をいう。

(8) 『落款花押大辞典下巻』(淡交社、昭和五七年) 九四四頁。

(9) 『道貝鑑定家』清昌堂やました主人・山下寛一郎氏。

(10) 『宗及茶湯日記自会記』(『天王寺屋会記』茶道古典全集第八巻、淡交社、昭和三四年)

(11) 『笑顔宗訢南宗寺』後述 三一(一)項参照。

(12) 『大徳寺法階』大徳寺高桐院住職松長剛山師に御教授いただいた。

1	再住	七十歳以上
2	前住	四十から七十歳
3	住持	
4	東堂	住職
5	西堂	
6	徳称(長老)	副住
7	前堂	
8	首座	

9 蔵主
修業僧

10 侍者
新戒

(13) 『古溪宗陳大徳寺入寺』『世譜』一三七頁。

(14) 『写真資料』仙嶽宗洞「達磨忌の偈」(『大徳寺歴代墨蹟精粹』読売新聞社、昭和五二年) 一二二頁。仙嶽宗洞「印證、与雲英宗偉」(『大徳寺墨蹟全集』第三巻、毎日新聞社昭和六十年) 二二八頁など。

(15) 『旧の話頭』『世譜』一三三頁に、「萬法ト侶タラザル語ヲ舉スルヲ聞テ忍爾トシテ投契ス」とある。

(16) 『勘辨』考えて見分けること。また、しらべて区別すること。(新漢和辞典、大修館)

(17) 『江西』長江中流の南岸、今の江西省あたりの地方をいう。

(註16同)

(18) 芳賀幸四郎『禅語の茶掛一行物』(淡交社、平成元年) 一三二頁。

(19) 『南宗寺堂舎焼失』『堺市史 第七巻別篇』(堺市役所、清文堂出版、昭和五二年) 六〇四頁。

(20) 註(19)六〇一頁より六〇四頁。

(21) 永島福太郎『大徳寺と堺衆』(『大徳寺と茶道』淡交社、昭和四七年) 一四六頁。

(22) 註(19)六〇四頁。

(23) 註(13)同。

(24) 『奉加帳』神仏に種々の財物を寄進すること。発願の趣旨を記し、寄進者名と寄進した金額などを記した帳簿を奉加帳という。(岩波仏教辞典)

(25) 『世譜』一三五頁。

(26) 〈はかたや宗壽〉「会記」一五四頁。

(27) 〈宗句〉「会記」一六二頁。

(28) 〈山上宗二〉「山上宗二記」(茶道古典全集 第六卷) 淡交社、昭和四二年) 一一七頁。

(29) 奥野高廣『織田信長文書の研究 下巻』(吉川弘文館、昭和六三年) 八二頁。

(545) 千宗易宛黒印状

就越前出馬、鉄砲之玉千到来、遙々之御懇志喜入候、猶原田

備中之守可申候也、謹言

(天正三年) 九月十六日

拋釜齋

信長(黒印)

【参考史料】

大徳寺高桐院藏「古溪和尚入寺之奉加帳」

(○印は『二十一條答問』に見る人。小書きは略した)

天正元年癸酉

古溪和尚入寺之奉加帳

九月拾五日

奉加之納帳

○百貫文

宗 易

○五十貫文

(天主寺屋) 宗 及

三十貫文

(油屋) 紹 佐

○四貫文

宗 句

十貫文

(千) 宗 把

貳貫文

宗 易(内儀)

貳貫文

(木津屋) 道 久

(略)

○五百文

寿首座

○五百文

慶首座

一貫文

滴首座

五百文

桔首座

○一貫文

登首座

○五百文

椿威首

○一貫文

好威首

三百文

舜首座

一貫文

(釣臺)

児首座

一貫文

(長蔵寺)

語首座

二百文

佑首座

○十貫文

(博多屋)

宗 寿

十貫文

(倉)

宗 臨

(略)

○十石

(薩摩屋)

宗 二

一石

(少林寺)

金蔵主

京榮之分納

○二貫文

春屋和尚

二貫文

道 三

(略)

二石

(長谷川)

宗 悦

五百文

(大和屋)

道 倫

五百文

(同)

宗 句

天正三年正月南宗寺禪問答と堺の茶人たち(石田)

本稿作成にあたって、大徳寺高桐院住持松長剛山老師に懇切なる御教示と貴重な史料の拝観掲載のお許しをいただいた。また、芳賀幸四郎・多田侑史両先生には大きな御助言を頂戴した。千原弘臣先生には西江水に関する資料をいただいた。いずれも、記して御礼申しあげた。